
タロとユマ

D E G

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タロとユマ

【Nコード】

N6978F

【作者名】

DEG

【あらすじ】

小さなアパートに住むタロとユマは相思相愛です。でも、ユマに頼りきりのタロは何かお礼をしたいと思っています。……季節はもうすぐクリスマス。タロはユマに素敵なプレゼントを贈れるでしょうか？

いち（前書き）

べた恋『クリスマスチャリティー企画』参加作品です。よかったら、
タグから募金をして下さいな！

いち

——都心部からちょっとだけ離れた郊外に建つ、〇×アパートの二階、最奥の一部屋。台所付きの2LDKで、ベッドは一つ。ここが今、僕の住んでるお家です。

……あ、違いました。“僕ら”が住んでるお家です。

「……ぷはぁー」

こんばんは。いきなりジジ臭くて失礼してます僕、『葉伽瀬 太呂』
といます。男です。

ただ今、夜二十一時です。

六畳あるかないかの小さな部屋に一つあるコタツにこもり、熱いお茶を飲んで一息ついてます。ただ今、十二月です。冬です。

「……」

湯飲みを持ったままぼんやりしてます。僕はある人が帰ってくるのを待っているのです。

「——ただいま」

「あつ、お帰りなさいユマ!」

ついに、コタツから見える玄関のドアが開いて、女の人が帰ってきました。僕はコタツから転がり出て彼女を迎えます。

「あれ、醤油の匂い。なんか作ったの?」

「はい、今日は寒いので御うどんを作りましたよ」

「へえ、うどんか。よしすぐ食べよう」

彼女——ユマはそう言ってコートを脱ぎながら靴を部屋に置き、ジーンズからジャージに下を履き換え始めました。

いつもながら女性らしい綺麗な脚をしていますね。もう見惚れてしまいます。

「……おい、うどん」

「あ、はい、すぐに温めます」

おっと、本当に見惚れていたようです。いけないいけない。

——えーと。あの男らしい方は『高嶺 優愛』という女性です。優愛と書いて、『ユマ』と読みます。いい名前だと思います。

ユマは、僕の伴侶です。いえ、パートナーというのでしょうか。平たく言うと、恋人というやつです。大好きな人です。僕らはこのアパートの一室で一緒に住んでいます。

……実をいうと、僕が住まわせてもらってる形なのですが。今は置いてきましょう。

「はいどうぞ。お肉はあんまり入ってないですが」

「いいよ、美味しそうじゃん。……いただきます」

僕がコタツにうどん鉢を二つ運んで座ると、ユマは七味唐辛子をパッパツと振り掛けてうどんを啜り始めました。

僕が作ったのは肉“風味”うどんです。あくまでお肉は味を出すのみで、メインは野菜です。

「んむんむ……ウマイ」

「それはよかったです」

美味しそうに食べてくれるユマと一緒に、僕もズルズルうどんを啜ります。

「なんだろうな、タロが作ったら何故か『お袋の味』って感じがする」

「手間と時間がかかってるだけです。でも、うれしいです」

タロって僕のことですよ、太呂。お芋みたいな名前でしょう。

「やっぱり髪結ば」

食べながらユマがそう言って、ヘアゴムで後ろの髪をポニーテールにまとめ始めました。彼女の髪は肩まである真っすぐな黒です。で

も、よく邪魔だと言ってああして結ってます。

「ユマは本当にポニーテールが似合ってます」

「……なんか恥ずかしいんだけど」

えー。僕はポニーテールのユマがとても好きなのですが。

ちなみに僕の髪は黒のショートです。いつも程よくツンツン起っています。ワックスなんかつけません。寝癖です。

「——ふう、温まった。ごちそうさん」

「お粗末様でした」

僕らは一緒に晩御飯を食べ終えて満足しました。僕はお腹一杯ですが、ユマはいつも腹八分目でごちそうさまをします。偉いです。

「もうひと温まりどうですか？ お風呂が沸いています」

「あ、本当？ じゃ入るわ」

ユマは食器を台所にやってからお風呂に入りに行きました。

僕もその間に、ご飯の後片付けをしています。早くしないと、ユマとお話できませんからね。

「——お湯加減はいかがですか？」

「ちよーどー」

お風呂からユマの気持ち良さそうな返事が聞こえます。僕はご飯の前に入りました。あ、お湯は換えてません。勿体ないので。

「――ふーっ。生き返った」

三十分程で、寝巻に着替えた（下はジャージのままですが）ユマがお風呂から上がってきました。ちょうど僕も家事を終えたところです。

「今日もお疲れ様でした」

「ん。タロはもう入ったの？」

僕が頷くと、ユマはタオルで髪を拭きながらコタツの横のベッドに座りました。

「……今日は仕事見つかった？」

そして、僕に何気ない調子でそう問いかけます。僕は少し俯いて答えました。

「……いえ、どこもダメでした」

「そっか。最近不景気だしなあ。中々雇ってくれないか」

ユマはそんな僕を見て、別段気にする風もなくなため息をつきました。

「ごめんなさい、ユマ」

「何で謝るんだよ。別に私だけでも充分働けるんだからさ、タロはいいのっ」

……ユマはいつも僕にこう言ってくれます。それで僕のことを好きだと言ってくれます。

「ほら、もう寝よ」

「……はい。ユマの頭が乾いたら寝ましょう」

「もう乾いてるってば」

ユマはもう一度髪を拭いてから、タオルを物干し竿に引っ掛けてベツドに転がりました。

「うー……布団が寒い。タロ早く入りな」

「あ、はいっ」

僕は寝巻にすばやく着替えると、電気を消して、一つしかないベツドにユマと一緒に潜り込みました。

まだ二十二時を過ぎたばかりですが、テレビもないので僕らは早めに寝ます。明日もユマは、朝早くから仕事に行かなければなりません。

「ゆっくり休んで下さいね」

僕は毎晩ながら、布団の中でユマの腕を抱いています。そうするととても安心します。ユマも嫌がらずしてくれます。

「もう寝るだけじゃん……おやすみ」

「ふふ……お休みなさい」

……そうしてお休みの挨拶をすると、ユマはすぐにすっかり寝てしまいます。彼女は寝付きがいいのです。

僕はそんなユマの寝顔を見ながら、本当に幸せな気持ちで眠りにつきます。

僕はユマが大好きです。

に（前書き）

♪ べたの『べ』の字も出てきませんが、朗らかにお読み下さい……

に

朝。

「ピピピピ……」と毎朝七時になると断続的に鳴る電子音に、僕はむにやむにやと瞼をあげます。

「んう……う」

ポチツ、と目覚まし時計のスイッチを止め、もぞもぞと体を起こしました。が、布団の外はとっても寒いです。家にはコタツ以外の暖房器具は置いてません。

「タロ起きたかー？」

「んん……んあ、おはようございます、ユマ」

僕の横には既にユマの姿はなく、彼女の声が台所から聞こえてきます。

ユマは毎朝早起きです。僕は目覚ましをかけないと中々起きられないですが、ユマは僕より早く起きて朝の支度をしています。なんだか面目ないです。

「ほい」

ユマがコタツ机にトーストと目玉焼きを持ってきてくれました。僕は急いで着替えて、ユマと一緒に座ります。コタツは既に暖かいです。

「歯、磨きな」

「あ、すみません」

つと、歯磨きを忘れてました。

洗面所でシャコシャコと五分歯磨きを終え、再びコタツへ戻るとユマは待っていてくれました。

「いただきます」

「ん」

僕の食事はゆつくりです。ユマはあつという間に食べ終えてしまいましたが、いつも僕と一緒に「ごちそうさま」をしてくれます。

——ユマは八時にお仕事に行きます。朝ご飯を食べてしばらくのんびりしてからのお出勤です。ユマはこの間にお化粧したりします。

「さて、そろそろ行くわ」

「はい」

コートを羽織り鞆を持って、玄関へ向かうユマを見送ります。

……僕は留守番です。

「いつてらっしゃいユマ」

「ん、いつてきます」

僕はいつも、ユマの腕を握ってお別れします。何だかそうしないと淋しいからです。

ユマはふわつと笑って僕の手に触れ、出掛けていきました。

「……」

僕は少しユマの余韻に浸ってから部屋に戻ります。僕も、自分のお仕事をしなければいけません。

まずは、お掃除やその他の家事です。……というかそれ以外僕が出来ることは、今はありません。

ユマのタオルや脱いでいったシャツをかき集め、最初はお洗濯です。それが終わるとベッドメイクをしたり台所を片付けたり……そうしているうちに、あつという間にお昼近い時間になってしまいます。

「……あ。今日は燃えるゴミの日でした」

思い出した僕は燃えるゴミの袋をまとめて、自分のコートを着てアパートのゴミ捨て場に向かいました。

真っ白い息が広がる外は本当に寒いです。そろそろ雪が降るんじゃないでしょうか。……あ、ゴミ捨て場と同じアパートに住んでるご婦人方がいらっしやいました。

「おはようございます」

『あ……あら、おはようございます』

僕がお辞儀をすると、ご婦人二人も会釈を返してくれます。世間話の邪魔をするのもいけないので、僕はゴミを捨てたらすぐに部屋に戻ろうとしました。

『……あの人、本当に働いてないのねえ。まだ親のスネをかじってるのかしら』

二階への階段を登っていると、ふと彼女らの小さな声が聞こえてきました。

『いいえ、毎朝奥さんが出掛けていきますの。男の人なのに仕事は全部奥さんがなさっているそうですよ』

『まあ、それでよくあんな白々しい……』

——パタン。

玄関に戻ると、フツとため息が漏れました。

何度言われても情けない心地がします。ユマに頼ってばかりで、僕は働きもしてません。まだユマは奥さんじゃないですけど……僕だって男の端くれです。ユマは要らないと言ってくれますが、彼女の助けにくらいなりたいです。

「……今日も行かなくちゃ」

部屋に戻り、あらかた家事を片付けた僕は、いつものように求人情報誌に目を通し始めました。

……

『ですのでねえ……余り期待はしないで下さいね』

「は、はい……」

本日三軒目の面接……二軒目までは門前払いですが。夕方になってやってきたこのお店でようやくお話を聞いてもらえました。

僕は時間があればこうしてお仕事を探してます。といっても、求人情報誌に載ってるようなアルバイトでもやっぱり駄目みたいです……この不況の時に雇ってくれるところなんてほとんどありません。

『一応学歴はしっかりしてるみたいですから……まあ、うちの状況に依りますね。少し検討しますので明日ご連絡します』

「はい、わかりました。どうもありがとうございます」

僕は面接官の方にお辞儀をして、狭い事務所を出ました。

「……はあ」

本日四度目のため息です。

この近所にはもう働き口はありません。これで駄目だったら、僕は

またユマに甘えたままです。せめて、自分で何か役に立ちたいです

……

——僕は、本当はお金持ちの息子でした。子供の頃からお父さんお母さんの英才教育を受けて、勉強をたくさんしました。有名な偉い大学も卒業しました。それが親の望みだと思ってたからです。

でも、僕はいつか自分の意志で生きたいと思っていました。だから二年前にお父さんの会社を継げと言われた時に、生まれて初めて両親に反抗しました。とっても強く反抗しました。

そうしたら、僕はお家から勘当されてしまいました。

「二度と家に帰ってくるな」と言われてしまい、僕はちょっとのお金を渡されて追い出されました。悲しかったですけれど……僕はそれから仕事を探したりして、自分の力で生きようと思いました。でも、社会はそんなに簡単じゃなかったです。

社会に出るまで気付かなかったのですが、僕はお仕事をこなすのにものすごく時間がかかる鈍臭い人間でした。何も出来ないわけではないのですが、同じお仕事でも他の人の三倍くらい時間がかかってしまいます。

だからどこへ雇ってもらっても……僕より役に立つ人が来て、僕はすぐクビになってしまいました。そのうち段々雇ってくれるところも、親に貰ったお金もなくなっていったって、住むところにすら困っていました。

……そんな時に、ユマと出会った僕は彼女に助けられたのです。ユマは僕にとって、本当に女神様です。

「……あ、こんな時間」

とぼとぼ街中を歩いていると、いつの間にか六時を回っていました。そろそろ晩御飯のおかずを買いに行かなければいけません。

今の僕に出来ることといえば、お掃除かお料理しかありません。それすらとんでもなく時間がかかってしましますが……頑張らなくっちゃ。

僕はそのまま近所のスーパーに足を向けました。

「（ああ……そういえば、もうすぐクリスマスですね）」

ふと周りを見渡すと、クリスマスツリーを売るお店やサンタさんをモチーフにした広告など、街には緑と赤の色がクリスマスの雰囲気を作り出していました。さらに道行く若いカップル達は、楽しそうに聖夜のお祝いや贈り物についてお話しています。

……クリスマスかあ。僕もユマに、きっと何か素敵な贈り物をしたいです。

さん

『高嶺さん、十四番様のご注文持って行ってー』

「はい」

こんばんは。私、『高嶺 優愛』。タカミネ、ユマだよ。

「小倉さん、二番様のサンドイッチセットお願い」

『はい』

「三上さんは新規十二番様、オーダー取ってきて。余裕あったらお冷も注いで」

『わ、わかりました』

ちよつと今すぐく立て込んでるけど……私、家の近所のファミレスで働いてるんだ。

このクリスマスから年末の時期は忙しさが半端じゃなくてさ。バイト君なんか朝から晩まで連日の客入りで、へとへとになってるみたい。私はまだ大丈夫だけど。

「お待たせしました、アイスコーヒーとケーキセットのお客様？
……ごゆっくりどうぞ」

注文運んで。

「いらつしゃいませ。お二人様でしょうか？ ……二名様ですね、こちらへどうぞー」

案内して。

「六番様ご新規お願いします。……佐藤さん大丈夫？」

『あ、大丈夫です……』

バイト君の面倒見て。

「お待たせしました、目玉焼きハンバーグとパンセットでございます」

注文運んで……ひたすらこれのループ。

居酒屋とかじゃないからまだマシだけど、それでも最近は休んでる暇がほとんどない。夕方以降なんか寒さしのぎに入ってくるお客さんもいるし、こりや今日は日付変わるまでフル勤務かなあ。普段は夜間シフトで早めに帰れるんだけど、ほっとくワケにもいかなさそうだから。

『高嶺さん、ちょっと仕込み手伝ってあげて！』

「はいはい」

おっと、オーナーが呼んでる。もう厨房もてんでこ舞いだ。ちらつと店の時計を見たら、もうすぐ針が左上で直角になりそうだった。

そろそろ九時か……タロに連絡したいけど、ちょっと無理だなこ

りや。

『高嶺さん！』

「今行きますよー」

あー忙しいわ。

……

「お疲れ様でしたー」

『お疲れ様でしたー』

——ただいま深夜の零時過ぎ。やっと仕事が一息ついたから、もう私がいなくてもいいと思ったら……こんな時間になっちゃった。

『お、いつもごめんね高嶺さん。助かったよ』

着替えて店の裏口に行こうとしたら、ちょうどオーナーと鉢合わせた。

「ははは、給料上げてくれます？」

『うーん……じゃあ、気持ちだけな。君がいなくちゃ店がもたないからね』

「わお、ありがとうございます。んじゃ失礼しますね」

『はい、お疲れ様』

私はオーナーにお辞儀して、ファミレスを出た。

私、ここの正規店員なんだよね。普通に働くだけじゃなくて、新人のバイト君を指導したり、今日みたいに人手が足りないところ補ったり……大変だけど、この不況にきちんと雇ってくれる数少ない場所だから、ずっとここで働いてるんだ。

「……ふー寒いっ」

一応マフラーもしてるけど、やっぱり冬の夜中って目茶苦茶だわ……
…うー、お腹空いた。タロ何か作ってくれてるかな。

テポテポ歩いて、家までの十五分くらいは街中を通る。……にして
も、クリスマス近い街って夜中でも明るいね。無駄に派手なイルミネーションとかがたくさん光ってて、深夜って気が全然しない。お遊びカップルとか、お疲れサラリーマンとか、普通に大量に歩いているし。まあ物騒じゃないからいいんだけどさ。

……。

クリスマスなあ。そういえば、タロと出会ってからもう一年も経つんだ。

「あ……雪」

ちょっと耽りながら歩いてたら、いつの間にか空から白いかけらが降ってきた。

……降ってきた。かなり大量に。え、ちょっと、普通に濡れるくらい降ってきたよ？ マズイな、傘持っていないのに。

周りの人達もいきなりの大雪に驚いて走り出す中、私も顔を俯けながら少し慌てて足を速めようとした。

「——あ、ユマ！」

「え……タロ？」

と。前から聞き慣れた声が見てみると、傘を持ったタロがこっちに歩いてきた。

「遅いし雪が降りそうだったんで、迎えに行こうと思って……大丈夫ですか？」

「う、うん。今降ってきたばかりじゃなか」

タロは

「よかったあ」とか言いながら私の横に来て、自分でさしてた傘を手渡してきた。

「すみません、自分の傘を忘れてしまつて……どうぞ」

「どうぞつて……何でタロが濡れてんの」

「え、だって二人で入ったらユマが半分濡れてしまいます。風邪を

引いたら嫌です」

……こいつはー。

「あのね。私だってタロが濡れんのは嫌なの。ほら、入りなさい」

「ええっ、わぁー!」

ぐいっと引つ張って無理矢理傘の中にタロを入れる。こうでもしないとホントに、台風が来たって私に傘譲るからな。このおバカさんは。

「……ユマは優しいです」

「何バカ言ってるの。早く帰るよ」

優しいのはどっちだよ、全く……

——帰ったら、タロは昨日のうどんだしの残りで肉団子のスープを作ってくれた。

「出来立てをユマと一緒にじゃないと、美味しくないです」とか言っ
て、自分も食べずに待ってたらしい。

……こんな時間までわざわざ待たなくなっ
て、別にいいのにな。ちよっと嬉しかったけど。

「——なんか、タロって変わんないな」

「へ?」

風呂も済ませて、二人でベッドに入ってから。暗闇の中で私はなんとなく話し出した。

「なんだかんだで一年もこうして一緒にいるけどさ。公園で死にかけてた時と、あんまり変わらないっていうか」

「はは……そうですか？ もう、一年も経つんですね……」

お互いに、去年のこの時期の事を回送してみる。

——私がタロと初めて会ったのは、去年の秋頃だった。その時から私はあのファミレスの正規店員だったんだけど。

新しく入ってきたバイト君の中に、『太呂』って名前の男の人がいて。なんだか面白い名前だから妙に印象に残ってた。けど実際に見てみたら、割としっかりしてそうな人だな、って思ったんだっけ。

でも、タロは見た目よりなんだか報われない感じのする人だった。飲み込みは早いし、仕事も人並みにちゃんとこなしてたんだけど……とにかく時間のかかる人でさ。

他のバイト君がばつぱと出来る仕事も、タロがやったらどうしてかものすごく手間がかかったりして……ちゃんと頑張ってるはずなのに、自然と他より役に立たない人間だって認識されてた。それで、また新しく入る人に押し出される形で、とうとう十二月にクビになっちゃったんだよな。

まあ……何と云うか、ちゃんと働いてるのを見てた私としても不憫に思えたわけで。何となくタロのことが気掛かりになってたんだ。

「びつくりしたなあ、タロがホームレスやってた時は」

「ちょうど前日に、アパートを追い出されて……お恥かしいです」

そう。私がその後タロを見つけたのは、なんと真冬の公園だったんだよ。しかも毛布一枚でベンチの上に寝てるところ。

私は野宿してるタロを見てぎょつとした。もう、考えなしにとりあえず駆け寄って、頬つぺたを叩きまくった。だってホントに死んじやうと思ったもん。

「あの時にいただいたお粥は、人生で最高の味でした」

「それは大袈裟だって……」

「本当ですよ。天にも昇る幸せな気持ちでした」

……とにかく、私はタロを担いで自分の部屋に連行した。何でか、死なれるのがすごく嫌な気がしたんだ。それでコタツに突っ込んで、適当に温かいもの食べさせようと思ってお粥を作ったのさ。

そしたら涙流しながら

「ありがとうございますありがとうございますありがとうございます」って連射されて……それで身の上聞いたら、また外に放り出すなんて余計出来なくなつてさ。そのまま家に置いたげたんだ。

元々顔はなじみだったし、別に無害な男だってなんとなくわかったから。

「あの時から」

「ん？」

「あの時から……僕、ユマに夢中でした。好きでした」

「……うん」

そういえば、最初からこういう恥ずかしいことも素直に言うヤツだったな。助けてあげた次の日から、いきなり

「貴女は女神様です！」だもん。

そのくせ、初めて私がベッドに誘った時（単に眠るために、だからな？）なんかトイレで寝ようとしたっけ。それも汚いから無理矢理布団かぶせてやったんだけど。

……私は、いつからかな。

「本当に、ありがとうございます、ユマ」

「いいよ。私も助かってるから」

いつから……タロが好きになったんだっけ。

最初はペット感覚、それから料理番になって、家事とかもやってくれるようになって。

何でもかんでも、私のためについて動いてくれる。それはもう子供みたいに純粹に。でもなぜか敬語使うし、やっぱり鈍臭いのは鈍臭いし。それがどこか健気だし……

……いつからかわかんないけど。いつの間にか、タロがいないと寂しいような気持ちになってた。

「私もさ、好きだもん」

「……はいつ。すごく、嬉しいです。幸せです」

あー……なんかバカツプルみたい。ベッドでこんなこと言い合ってるってなんか慣れないや。まだタロとは何にもしてないのに。

「おやすみなさいユマ」

「ん。おやすみ」

不思議な人だよ、タロは……会えて良かった。

よん

「え——本当ですかっ？」

土曜日の正午、部屋でお昼ご飯を食べている時。

かかってきた電話に出た僕は、ユマの横で唐突に大きな声をあげてしまいました。

「どしたの？」

「あつ、いえ………はい、はい。あ、明日からですね？ わかりました。どうもありがとうございます！」

僕は電話越しに頭を下げまくり、ふうっ、と息をついて通話を切りました。

「……なあ、どしたのさ」

「あ、あの、お仕事が見つかったんです！ アルバイトですけど」

そうです、先日面接に行った小さな喫茶店から、採用のお電話がかかってきたのです！

「え……雇ってもらえたの？」

「はい！ 明日からすぐお仕事です！ やつとユマのお役に立てます！」

今までユマの家に居候状態でしたが、せめて家賃の半分くらい、自分の身で稼がなくては！　ようやくちゃんと恩返しが出来ますよ！

と……意気込む僕と裏腹に、ユマを見るとご飯を頼張ったままあまり嬉しそうな顔をしていないような気がします。

「えっと……ユマ？」

「ん？　ああ、良かったじゃん」

しかしユマはすぐ笑ってそう言ってくれました。きつと、冷ご飯が硬かったんですね。すみません。

「ご飯温め直しましょうか？」

「へ？　いや別にいいよっ」

——ユマは、今日は夕方からのお仕事です。こうして一緒にお昼ご飯を食べられるのは、土日の二日だけなのです。

明日からのお仕事で、日曜日をユマと過ごせませんが……ユマの助けになるために頑張らなくては。

「きつとお役に立ちますから、明日はゆっくりして下さいね！」

「……うん。頑張ってな」

ユマは優しい応援を僕にかけてくれました。

——そして翌日、日曜日。

『えーと、じゃあ葉伽瀬さん？ マニュアル通りをお願いね』

「はいっ」

お家から結構離れた、名もない喫茶店が僕のバイト先です。歩いて来なきゃならないので、早朝に家を出ました。残念ながらユマとは入れ違いです。

というかここ、中身は普通なんですが……不思議です、日曜日なのにお客さんがほとんどいません。あんまり繁盛なさっていないんでしょうか。

とはいえお仕事はこなさねばなりません。接客は今まで何度も経験済みなので、きっと大丈夫です。

「あ、いらっしやいませっ！」

さあ、夜までしっかり働きましょう！

………

……日曜日は、私の定休日。昨日の夕方シフトから今日の早朝まで働いて、あくびしながら九時くらいに帰ってきたんだけど。

「……」

部屋に入っても、タロがいないや。

いつもなら、帰って来た途端に玄関にやってきて

「お疲れ様です！ お風呂にしますか？ ご飯食べますか？」って、そりゃあ新婚さんみたいな出迎えをしてくれるんだけど……

「……ただいま」

なんか、誰もいない部屋に帰ってくるのって久しぶりだ。去年タロがやってきてからは、ずっと家でタロが留守番してたからな。

着替えて、鞆おろして、とりあえず洗面所……

……あれ、風呂が沸いてる。タロ沸かしてくれてたのかな。寒かったし疲れてるし、ちょうどいいや。

——で、風呂にもサツと入って。私はそのままベッドに倒れ込んだ。……んだけど、ふと気付いてまた体を起こした。

コタツ机に、おにぎりが置いてある。んでその横に、女の子みたいな字の書き置きが。

『お疲れ様です！ お風呂沸いてますよ！ お腹が空いてたら、これも食べてください！』

うわー……手紙まで。

「……ごめんな」

私は苦笑を浮かべながら書き置きを読んで、おにぎりには手をつけずにまたベッドに寝転んだ。

ごめんタロ。疲れて、食欲ないんだ。

……それを誰かには言えず、またお休みも言わないで、私は布団をかぶって壁に体を向けた。一人で寝るのも随分久しぶりだった。

チツ……チツ……チツ……

「……ん……」

——目が覚めたら、もう部屋が暗くなり始めてた。瞼を擦りながら時計を見たら、もう六時過ぎ。ちよつと寝過ぎたかな……

「んむ……タロお……？」

無意識に彼を呼んだ。でも自分の部屋からは、時計の針が動く無機質な音しか返事がなかった。

あ……まだ帰ってないんだ。頑張ってるなあ……

私はとりあえずベッドから降りた。けどコタツに入ろうとしたら、スイッチが入ってない中身がすごく冷たくて、やめた。

机の上のおにぎりもすっかり冷めてる。ラップに包んであるそれを

触ったら、なんか急に寂しい気持ちになってきた。

なんか、変だ。妙に落ち込んでる。何でだろ。

……私はまたベッドに入った。何だかなんにもする気にならない。
タロが帰ってくるまで、もう一回寝よ。

「……………」

チツ……チツ……と、ひたすら続く時計の音。

——懐かしい感覚だ。タロがここに来るまでは、日曜日っていつてもこうして何もすることがなくて……ずっと一人だったし。時々店の人に遊びに誘われたりしてたけど、気乗りしなくて誰とも親しくなるってこともなかった。

狭い小さな部屋は静かでもいいけど、寒くて寂しい。しばらく忘れてたな……タロといったらそんなの忘れちゃうから。

「……………」

……結局、それで降寝付けないままずーっとぼんやりしてて。気が付いたら九時になってた。

「——ただいま帰りました」

その時、聞き慣れたはずのその声がやけに嬉しく感じた。すごく待ち遠しかった気がして、私は思わず玄関の方へ体を向けてた。

「あれ、寝ていたんですか？ 起こしてしまいました……？」

「う、うん……お帰り」

タロはもう一回

「ただいまです」と言っただけで部屋に入ってきた。そしたら私が食べずにいたおにぎりを見て、一瞬心配そうな顔になった。

「ああ、ちょっと、疲れててさ……」

「大丈夫ですか？ 具合は悪くありませんか？」

「ん、別に大丈夫」

私がそう言っただけで、タロは安心したみたいに笑った。

「遅くなってごめんなさい。すぐ晩御飯用意しますね」

「うん」

……晩御飯は、スーパーの惣菜と作り置きのおにぎりだった。私はともかく、タロが出来合いの物買ってくるのも珍しいな。

「すみません、ユマもお腹空いてるだろうと思って……」

「ん……いいよ」

別にまずくないし、いつも食べてたしね。たまにはいいか。

「仕事、どうだった？」

「はい、たくさん働きましたよ。でも中々お客さんが来なくて、僕なんかほとんど皿洗いだっただけですけど」

「そっか」

クリスマス前なのに、珍しいな。その店大丈夫か？ ちゃんと給料くれるのかな……

「……ユマ？」

「え？」

不意に、タロが箸を止めて私を見つめてきた。

「本当に大丈夫ですか？ なんだか元気がないです」

「そう……かな？ こんなもんだけど」

私はすぐ何でもない風に笑ってみせた。

……でも、確かに今ちよつと顔が沈んでたかも。

「きつと働きすぎて疲れたんですよ。ご飯を食べたら、すぐ寝ましよう。今日は僕も疲れました」

「ん、そだな」

……タロは気遣うようにそう言って、晩御飯を食べたらホントにすぐ私と一緒にベッドに入った。

それで私が何か話す間もなく、先にぐーすか寝ちゃったよ。よつぽど疲れてたんだな。

.....。

.....明日もこうやって、すぐ寝ちゃうのかな。私が帰ってくるまでに。ねえタロ.....

」

今日は十二月二十三日、月曜日。明後日はクリスマスですね。なん
だかウキウキします。

「…………ふう」

でも、やっぱり僕のバイト先では閑古鳥が鳴いています。まだ働い
て二日目といえばそうですが、昨日から計算しても、今日夜までに
来たお客さんは未だフタ桁です。

お客寄せにお店を彩るクリスマスアレンジの派手な飾りが、なんか
虚しい感じがします。店員も実質まさかの僕一人なので、店内なの
にどこか寒いです。

「(…………やっぱり高いのでしょうか)」

ここのコーヒー、なんと一杯七百円です。しかもお代わり不能です。
喫茶店ではこれが普通なのかもしれませんが、僕はちょっと遠慮し
たいお値段です。

ああ、でもユマと喫茶店でお茶するのは実は僕のささやかな夢だ
ったりもします。お金が勿体ないので、いつも家の粗茶でゆったり
してますが。

……………。

そういえば、昨日からユマの元気がないような気がします。今朝も
早く一緒に出勤して途中で別れたのですが…………何と言うか、いつも

の明るい感じがないようでした。雰囲気は遠慮がちだったというかな……

もし病気で無理をしてたら大変です。帰ったら一度、お熱を計ってあげなくては。

『……葉伽瀬さん、ちょっと来てくれるかい……？』

「え？ あ、はい」

僕がお店の入口で構えていると、奥から不意に店長に呼ばれました。行ってみると、何やら店長は沈んだ表情で待っています。

「何かあったのですか？」

僕が尋ねると、なぜか店長は吃りながら視線を逸らしました。そして頭を掻いたりした後、渋い顔で口を開きました。

『その……実はねえ——』

……

やっぱり、ユマだよ。……って、元気に言える気分でもないんだけどな。

今日も激務を終えて、帰宅はいつもながら日付が変わってから。特にクリスマス直前って客入りのピークだから、地獄の忙しさなんだよな。なんかいつもより疲れちゃった。

……まあ、疲れてる原因は仕事だけじゃないけど。今日はもう、タロは帰ってるよな……

「——ただいま」

部屋に帰ったら、電気はついてた。でもお帰りの返事が聞こえない。不思議に思っただけで居間に入ったら、コタツに座ってたタロが顔を上げた。なんだ、居るじゃんか。

「あ……お帰りなさい」

「ただいま……どうした？」

出迎えないなんて珍しいな。……やっぱり、バイトで疲れたのか？ 私は鞆だけ置いて、タロと一緒にコタツに入った。

「風邪引いた？　なんかあったのか？」

「いえ……ええと……まあ、はい……」

タロは歯切れ悪く、少し気まずそうにしながら小さな声で言った。

「あの……クビになっちゃいました」

「え……」

クビって——おととい雇ってもらったばかりなのに？　嘘でしょ？

「その、実はあのお店……前から経営が危なかったそうなんです。店員さんも見限って、みんな辞めちゃったらしくて……最後に僕を雇って頑張ろうとなさっていたんですが、やっぱり駄目だったよう……」

タロは苦笑いを浮かべながらそう説明した。

「ちょっと、でも——給料はちゃんと貰えたの？」

「あ、はい。一応二日分だけ……」

言いながら、タロは机に置いてあった封筒からお札を何枚か取り出して、すまなそうに私に見せた。

「これっぽちですけど、家賃の足しにでもして下さい……駄目ですよね、僕。結局全然役に立てなくて……」

「……何言ってるのさ」

けど、私は差し出されたそれを無理矢理タロに突き返した。

「タロが稼いだお金でしょ。自分で使いなよ」

「え、でも僕、家賃も……」

「そんなのいいってばっ!!」

——思わず

「バンッ!」と机を叩いて私は怒鳴ってた。タロが驚いて私を見た。
「家賃なんか、私が払ってあげるだろっ! そんなの、タロは気に
しないでいいから……」

「えっと……ごめんなさい、ユマ……」

タロが落ち込んだ様子で謝ってくる。夜中に怒鳴っちゃったことより、罪悪感がそっちに向いた。

タロだって、私のために働いてくれたのにな。けど……なんか嫌なんだよ。

「……ごめん。でも、ホントにいいんだよ……タロは無理して働かなくてもいいの」

「で、でも……僕もユマの助けになりたいです」

「なってる。なってるから」

私は、なんだかもどかしい気持ちで言った。

「タロが家で晩御飯作って待っていてくれてたら、私は助かるし嬉しいんだよ。……タロが働いて疲れてすぐ寝ちゃうのが、嫌なの」

「……」

正直、クビって聞いた瞬間少しホツとしたし。今日だってタロ、疲れた顔してるし……そんなの見たくない。

——しばらく外の冷たい風の音だけが部屋に響いた後、タロが静かに話し出した。

「……わかりました。このお金は、ちゃんと僕のために使います。……もう、働くのも遠慮しておきます。毎日晚御飯を作ってユマを待ってます」

「……ありがとう」

そこまで言葉紡いで、タロは急にまたしどろもどろになり始めた。

「それで……あの、このお金は……ですね……えと……」

「？」

で。いきなり顔赤くしながら、私の顔を正面から見て。

「ユ、ユマ！　よかつたら……こ、今度一緒に、おおお食事に参加ませんか！？」

「へ……？」

「明日でも、明後日でも、ああいえ出来ればクリスマスに……あの、無理でしたら構いません！」

……。

それはつまり……デートに誘ってる、のかな？

「う、うん。別に大丈夫だけど」

「ほ、本当ですか！？ よかった……女性をお誘いするなんて、生まれて初めてで……」

タロは頭をポリポリしながら、照れた顔してそう言った。その反応がすごく初々しい。

まあ確かに、わざわざデートなんてするのは初めてだけど……今更そんなに恥ずかしがることないのに。なんかこっちまで気恥ずかしいじゃん。

……ん、ちよつと待てよ？

「ねえそれ……そのお金で？」

「もちろんです！ 僕がユマに御馳走するのです」

……うん。

「だから……そんなのいいよ。タロの欲しいものとかに使いなつて」

「はい！ ですから僕は、ユマの笑顔が欲しいのです！」

と。タロは、私を思わず恥ずかしさと嬉しさで硬直させるようなことをさらりと言った。

「僕はユマと一緒に居られたら、それだけで最高に幸せです。それ

で、あの……こんなのがクリスマスプレゼントになるかわかりませんが、せめてユマに僕の感謝を贈りたいと思って」

「……………」

もう、言葉が出ない。なんて言ったらいいのかわかんないや。

「あの……やっぱりお嫌でしょうか……？」

「……馬鹿。んなわけないじゃん」

ホントに馬鹿だな、この恋人は。なんで好きなんだろ。

……そりゃ、こんなに優しいもん。こんなに私のこと想ってくれるんだもん。

「ありがとう、タロ」

「えーと……はい、どういたしまして」

ニコッと、彼はちよつと情けない笑顔を見せる。

それにつられて、私もだらしなくヘラッと笑った。

今年のクリスマスは——きつといい思い出になりそうだ。

12 (後書き)

ようやくクリスマスストーリーっぽくなってきた……でしょうか？；

ろく

クリスマスというのは不思議です。キリシタンでもない人々が、何を祝うと決めたわけでもなく特別な日として喜びます。

僕もその一人ですが。きっかけはともかく、年に一回みんなで何かを楽しめるのって、とてもいいと思います。

そんな聖なる夜に、僕はユマを……で、デで、デートに、誘ってしまったわけであります！ いつも一緒に居ますが流石に緊張しました……

「今日夜から雪降るみたいだなー」

——今朝、世間はいよいよクリスマスの日を迎えました。とはいえ、今日もユマはいつも通りお仕事があります。出勤前、ユマが新聞を見ながらつぶやきました。

「まさにホワイトクリスマスですねー。いい雰囲気になりそうです」

「何だよいい雰囲気って……」

ちょっと素敵ですよ？ 雪の降るクリスマスって。去年の自分を思い返すと、野外の雪にはあまりいい思い出がありませんが。

「どうかしましたか？」

「べ、別に何もないよ」

なんか今ユマが顔を赤くしていたように見えたのですが。気のせいですね。

「そろそろ行くなっ」

ユマはバツと立ち上がると、やけに手早く準備を整えて玄関に向かいました。

「あ、ユマ!」

「ん?」

僕は急いでそれを追いました。そしていつものようにユマの腕に触れながら言います。

「あの……では、今日の夜二十時に……公園で」

「うん。わかってるよ」

ユマは僕に微笑みながら答えてくれました。なんだか、それだけでも幸せな気持ちになります。

「んじゃ、いつてきます」

「いつてらっしゃいませ」

僕はすっかりユマを見送ると、部屋に戻ってすぐ家事を片付け始めました。今日は早めにお家の用事を済ませなければなりません。

——先程の待ち合わせはもちろん、今日のユマとのお食事の件です。実は昨日のクリスマスイヴに、ある素敵なレストランにお食事の予約をしておいてあります。やはり僕と同じことを考える方は多いのか、どこのお店も既に予約はいっぱいで、なかなか苦労しました。

しかしその甲斐あって、ここから少し離れた場所に隠れ家的なレストランを見つけたのです。ちょうど僕がユマに助けられた公園に近いので、待ち合わせの場所もそこにしたというわけです。

そのお店は雰囲気もいいのですがあまり有名でないためか、なんとか予約をとれました。代わりにお値段も結構なものです……予約コースの先払いで、今回の僕の収入があつという間に底を尽きましたよ。ハハハ。世の中すごいですね。

しかしこれで準備は万全です（というかこれ以外何も出来ません。僕、服も常用の二・三着しか持っていないので残念ながらお洒落にも限界があります。無論、美容室になんて行くお金も無いです）。ユマにはきつと幸せな一時を感じてもらいたいです！

うわー、なんか今から嬉しさでドキドキしてきました。何で僕がこんなに幸せになってるんでしょう。

こんなささやかなプレゼントですが——ユマの笑顔が見られるといいですね！

……

『高嶺さん下山さん、一旦休んでいいよ。お疲れ様』

『はい』

「はい、お疲れ様です」

——やっとお昼になった。オーナーから昼休みをもらって、私はバイト君の男の子と店内に入る。時計を見るとちょうど正午。

あと七時間かあ。いつもなら普通に働けるけど……今日はすごく仕事が終わるのが待ち遠しい。

『ハア……クリスマスなのに働くのって辛いすよね』

男女ロッカールームに行く前に、バイト君が愚痴るみたいに話しかけてきた。今はその気持ちもわからなくてもないな。

「んー、まあね。下山さんは誰か一緒に過ごしたい人いるの？ 彼女とか？」

『ああ、まあ一応いますね。あいつクリスマスプレゼント買ってやらないと怒るんすよねー。ていうか、クリスマスくらい休ませて欲しいんすよ』

ああ……単に休みたいだけね。クリスマスって別に祝日じゃないけど。

「今は働けるだけマシな時代だけどね。休暇とらなかったの？」

私の言葉にバイト君はため息をもらす。

『働かなきゃ食えないんすよ』

「なるほど」

私も正規だけと二人分稼がなきゃならないからな。有給も出来たけど、働けるだけ働いとくに越したことない。

『高嶺さんもお相手いるんすか？』

「うん、いるよ」

『マジすか？　どんな人？』

「えとね……おバカさん」

ハイ？　という反応が返ってきた。まあ一言じゃ伝えられないよな。

「ホントに変なやつでさ。今日やっとデートに誘ってもらったんだ」

『やつと、っすか？』

「うん。やつと」

思えば私つてもう二十三なのに、男の人と食事なんて大人っぽいこととした経験ないんだよな。誘われたこと自体は何回かあったけど、予定変えてまでって気になったことがない。

ま、今は三つ下のタロにその気になってるんだけど。今日は予定を変えて、夕方の七時頃にはあがらせてもらえるよう昨日オーナーに頼んでおいた。ちょうどこの下山ってバイト君のシフトと同じくらいの時間かな。

『なんか以外すねえ。高嶺さんでもっとカツコイイ人が彼氏なんだと……』

「カツコイイよ。見た目はね」

私はさらに頭にはてなを浮かべたバイト君をそれとなくかわして、女子ロッカーに向かった。なんだか何時になく楽しい気分だ。

……私こんなに好きだったんだな、タロのこと。夜が楽しみだわ。

………

——家事は全て片付けました。戸締まりも大丈夫、帰宅後のお風呂もオーケー。夜から降るらしい雪に備えて傘も持参しています、二本。

服はちょっとどうしようもありませんが……恥ずべき格好ではないはずです。

「で、ではいってまいります」

誰がいるわけでもないユマのお部屋に挨拶をし、僕はいざ、待ち合わせ場所の公園へと出陣しました。

待ち望む間の時間というのは長いようで短いものです。家事を終わらせたのは昼過ぎで、それからしばらくアセアセしているだけであったという間に十九時になっていました。まだ一時間ありますが、待ち合わせには早めに行った方がいいのです。

外は暗鬱とした曇り空が冬の夜を一層暗くしていました。今日の夜どころか数分後には降ってきそうな雲行きです。おまけに、クリスマスの雰囲気蔓延している街より郊外にある公園には人っ子一人おらず、待ち合わせ場所の選択を間違えたような気もしました。

しかし、僕の心には暖かな日の光が照っています。もうすぐユマに日頃の感謝を伝えることができるのですから、ちょっとぐらい寒く寂しい空気なんて僕を萎えさせるには足りません。

お尻が冷たくなるベンチに座って、後は待つだけです。公園の時計が八の数字を指したら、ユマに会えます――

.....

『よし。高嶺さん、今日はもうあがっていいよ』

「あ、はいっ」

今日も夕方からの客入りは相当だった。バイトの下山さんは時間になったから先に帰っちゃったけど、私は相変わらず時間を気にする間もなく働きまくった。そいで少し息をつけるようになったところで、ようやくオーナーから許可を貰った。

時刻は七時五十分。十分前だからギリギリかもなあ。タロなら遅れでも絶対許してくれるだろうけど、ね。

急いでロッカーで着替えて、オーナーに挨拶しに行く。今日はちょっとだけ服もよそ行きにしてあるんだ。流石にタロはお洒落とかに気を配る余裕ないだろうけど、私としてはやっぱり、好きな人とデートするわけだしな。へへっ。

「じゃあすみません、先に失礼しますね」

『はいお疲れ様……っと、電話だ。明日も頼むよ高嶺さん』

私を見送った後もオーナーはまた慌ただしく店に戻っていった。これからまだまだ忙しい時間だしなあ……でも、今日は流石に手伝えないからな。すみません。

私は腕時計を確認しながら店の裏口へ走った。わ、あと五分だ。急がないと、あの馬鹿はいつまでも待ってるからなあ……ふふふっ。

『——嶺さんっ！ 高嶺さんちょっと、戻ってきてー!!』

「へ？」

私にやけながら店を出たその時、裏口からオーナーがあわてふためいた様子で私を追い掛けてきた。

「どうしたんですか？」

『いや、少し困ったことになったんだ。今電話で――』

なな（前書き）

ほんのちよつと、過激な表現があるやもしれません……

なな

「……………」

ハアーツと吐いた息が、丸い電灯が一つあるだけの公園の暗がり
に霧のように広がりました。

顔を上げて見える時計は今……二十時三十分を指しています。ユマ
はまだ、来ていません。

きつと、お仕事が少し長引いているのでしょう。ユマはとても頑張
り屋ですから、忙しいお店を手伝っているんだと思います。何、ま
だ時間より三十分しか経っていません。大丈夫です。

しかし、そろそろ雪が降りそうですね……ユマの傘も僕が持つてい
るので、彼女がここにくるまでに降り出さなければいいのですが……

……………

『高嶺さん三番様にこれお願い!』

「わかりました」

……今、私はまたファミレスに戻って仕事してる。時間はもう八時
半。本当ならもうとくにタロとの待ち合わせ場所に行ってるはず。

『高嶺さん、高嶺さん！ こっちも頼むよ！』

「は、はい」

なのに、忙しさにのまれるような仕事にまた追われてる。

——原因はさっきオーナーにかかってきた、電話の内容だ。今日の夜からのシフトだった人が、いきなり来れなくなったらしい。しかも二人。

この一番の客入り時に、店員が二人も欠けたらそれこそ洒落にならない。だからさっき電話で連絡を受けたオーナーが、帰り際だった私を大慌てで呼び戻しにきたんだ。

けど断りたかった、今日だけは。今日だけは何かあってもタロのところへ行くつもりだった。とても大切な約束をしたんだから。

……なのに。ここでお店をほったらかして行ったら仕事がなくなるとか、オーナーが懇願してきてるのに断れないとか……そんな理由が、湧いて出た黒墨みたいに頭に浮かんで。結局私はまた店に戻ってきてた。

「お待たせしました、こちらへどうぞ……」

何やってるんだよ、私は。

『高嶺さん、十二番様お願い！』

何で普通に仕事してるんだよ。早く行かなきゃ。タロ、馬鹿だから

きつとまだ待ってるから。

『高嶺さん、ちょっと——』

呼ばれるまま仕事するまま、ひどく冷たくて真っ暗な何かに押し潰されそうな気持ちで、時計に目をやる。

もうすぐ九時。……いや、まだ九時だ。早く終わらして夕口に後で謝ろう——

……

……九時になりました。まだ、ユマの姿は見えません。

お仕事が、大変なんでしょう。でも絶対にユマは来てくれますから、不安なんて感じません。

「……きつともうすぐです」

独り言を呟いて、待ちます。

ほんのチラチラと、闇の中に白い雪のかけらが見え始めました。でもまだ大丈夫そうです。

……

「七番様の、追加、お願いします」

『はいはい!』

まだ終わらない。どんどん仕事が増えていく。

——十時。流石にまずい。遅すぎる。

『高嶺さん十番の片付けお願いします!』

「あ——はい」

……早く。どうしよう。早く行かなきゃ。

テーブルを片付けながら、楽しそうに笑ってる男女組の客が目に入って背筋が寒くなった。

『どうしたの、早く頼むよ!』

「……………」

手が、震えてる。

畜生。何でだよ。

早く行かせてよ。あいつ絶対待ってるんだから。

……

——……。どのくらいここにいるでしょうか。

二十二時、三十分過ぎ。待ち合わせ時間から二時間半が経過しました。

……お店、閉まってしまいましたかね……いえ、きっとまだ……

と、そのうちに。ちらほらとしか見えていなかった白い粒が、段々と明るい沢山の雪になって降ってきました。

「（ユマ……）」

僕は、もう一度時計を見上げて。

寒さを増し始めた暗い公園に立ち上がって、自分の傘をさしました。

……

『はあ、やっと落ち着いてきたな』

「……」

ようやく私がいなくてもなんとかなりそうになった時。窓の外では白い雨がゆつくりとクリスマスの夜に降り注いでいた。

『いや、本当に助かったよ高嶺さん。給料にはちゃんとプラスしておくからね』

もう……日付が変わってる。激務の疲れより、倒れてしてしまいそうなほどの焦りが心臓にまでふぶいてた。

「……あの、もう、いいですか」

『ああ、もうあがつてくれていいよ。後は何とかするから……バイトの人らも少し考えないといかんなあ……あ？』

オーナーの返事の後半は耳に入れずに、私は急いで走り出した。

——仕事着をぐちゃぐちゃにロッカーに押し込みながら着替えて。何も考えずに店の裏口を飛び出した。雪がいつぱい降ってる。

くそつ。何やってんだよ私は。なんで……なんで。

公園までは走っても十分程かかる。ひたすらそこ目指して走って、街のクリスマスの雰囲気なんて目にも耳にも入らない。入るのは刺すような冷たい雪だけ。もう感覚もない。

あいつは待ってるはず。雪降ろうが四時間遅れようが、待ってる奴だから。そういうこと平気でしてくれる馬鹿だから。

そんな、健気な人だから……絶対に約束を破りたくなかったのに。

「——ハアツ、はあつ、はつ、はあ、はあ、はあつ……」

公園に着いた。雪でよく見えない辺りを、息を切らせて急いで探す。

電灯の下、木の陰、ベンチ。深夜の寂れた公園。

「はあ、は……はあ……はあ」

……タロ……いない。

「はあ……っ……ふうっ、はっ……」

公園の周りにも、どこにも彼の姿は見えなかった。ただ真ん中に建つ時計が目に入ってきた。

……当然、だな。普通四時間も待つて、まだ同じ場所に突っ立ってる馬鹿なんていない。タロだって……嫌になるに決まってるじゃん。

「は……何、考えてんだ……はあっ」

何、期待してたんだろ。こんなに遅れて、そんな都合よく顔合わせられるわけないのに。

タロの気持ち無視して、仕事選んだんだから。嫌われたって文句言えないよな。

「……はぁーっ……っ」

虚しく渴いた口の中で唾を飲み込んで、私は近くにあったベンチの雪を払って腰掛けた。大雪ってわけじゃないけど、視界の半分は降り続ける雪の色で埋められてる。私はもう一度ため息を吐いて頭を抱えた。

……静かだわ。雪って音を吸収するんだっけ？ タロがなんか言っていた気がする。

……。

タロ……何時間ここにいたのかな。それとも早めに帰っちゃったかな。風邪、ひいてなきやいいけど。

ふっ、と走ってきたのが原因じゃないため息が出た。

「（あーあ……もう帰れないや）」

「——ユマ？」

その声がしたと思った時、反射的に顔をあげた。

「ユマ……っ！ 大丈夫ですか!？」

——聞きたくて、でも聞くのが辛かった優しい言葉の主は、雪の白と白の隙間から私の目の前まで走ってきた。そしていつもみたいに自分が持ってた傘を私の上にやって。

「寒くなかったですか？　すみません、傘を渡すのが遅れてしまつて……」

「え……タロ、あの……」

しゃがみ込んだ彼は、自分で何を言いたいのかわからずにもごもごする私の頭に積もった雪を撫でるみたいに払った。

「さっきユマをお迎えに行つたんですが、どうも入れ違いになつてしましまして……すぐ会えてよかったです」

「な、なんで……？」

そんなこと聞きたいわけじゃないのに。でも、なんだか頭がぼんやりしててわからない。

「……ユマ？　大丈夫ですか？」

タロは心配そうに私の顔を覗き込んできた。

「なん……で」

「はい？」

「だって……約束は……？」

私が俯きながら言うと、タロは苦笑を浮かべた。

「すみません……お店、閉まっちゃいました」

「……」

「ごめんなさいユマ。クリスマスプレゼント、渡せなくて……」

違う、違うよ。

「なんで謝るんだよ」

「え？」

「タロが……タロがだって………っう」

私ホントに最悪だ。

「ユ、ユマっ？ あああのっ」

「私が……ぐすっ、ごめんなさい………ひぐっ、うっ」

なんか涙が一気にでてきた。やっと謝ったのに、でも止まるはずもない。

「ごめん……っ………っううう」

「ユマ、あの、大丈夫ですからそんな泣かないで………ね！」

タロが慌てて私の両腕を握って、困ったように私に笑いかけてくる。

どうしてそんなに笑えるんだよ……余計悲しくなるよ。

「ぐすっ……ふうっ……えほっけふっ……」

「ユマ、あ」

私はタロの肩に顔を乗せて、その上でむせび泣いた。

私だって行きたかったんだよ、タロと一緒に……なのにごめんね……本当にごめん。

——そうしてしばらく、しんと降る雪だけが静かな公園で泣きじゃくって。

「ごめん、タロ……」

「もう、いいですよ。そんなに謝らないで」

私がタロの肩をぐっちゃぐちゃに濡らしてしまった後、もう一回謝った。

「でも、せつかく……」

「いいんです。それに僕、今すごく嬉しいんです」

けどタロは、ふるふる首を振ってまたちょっぴり情けなくニッコリ笑った。

「ユマがこんなに想ってくれてると伝えてくれましたから……これ

以上に素敵な贈り物はありませんから」

「……バカっ」

なんて恥ずかしいこと言うんだよ。なんで……そんなに、優しいんだよ君は。

「あ、でもこれじゃ僕ばかり貰ってますよね……えーと」

「……じゃあ」

そんなに優しくするから、もっと甘えちゃうんじゃないかっ。

私はグイッとタロの顔を、私の顔の真ん前に持ってきた。

「して」

「え……は、はひっ？」

「わかるだろっ。してくれたら……私も、嬉しいから」

え……、と固まるタロ。慣れてないどころかしたこともなさそうだ。私も、一回しか経験ないけどさ。

「い、いいんですか？」

「いいの。……髪、邪魔かな」

ふと思って、私は後ろ髪をゴムで括った。そいでポニーテールにしてからまたタロに顔を近づける。

「ほら、これでいいでしょ」

「……ユマ、可愛さが倍増しましたよう」

そういえばタロ、ポニーテールが好きとか言ってたな。変わった人だよ。

「……人、いませんよね？」

「いないよ」

タロは少しキョロキョロしてから、私の目を見て。一緒にゆっくりそれを閉じてお互いの顔が見えなくなった時、唇で私の唇に触れてきた。

「……ん……う」

する時の音以外なんにも聞こえない。白いクリスマスの夜は、公園のここだけ別世界みたいな気がした。

キスの仕方まで優しいな、なんて思いつつ……なんか、いつの間にか舌まで使ったものすごくディープなヤツをタロはしてくれてた。

さらには私を少し引き寄せて髪を撫でたりしながら、予想してなかったくらい私もタロに引き込まれて。どのくらいかわかんないけど、すごく長い時間をかけてやっと私達は口を離れた。

「……………」

余韻に浸ってか恥ずかしさからか、今更顔を赤くして目を逸らす夕口に私は尋ねる。

「……タロって、結構経験豊富だったりしない？」

「そ、そんな恐れ多い……今が初めてで」

じゃあなんでこんなに上手なんだよ。ホントにタロって読めないな。

「あの……嫌ではなかったですか？　ちょっと調子に乗ってしまった……」

「そんなことない。よかったから……ありがとう」

私が言うと、タロは子供みたいな安心した笑顔を見せた。

「よ、よかったで……ひつくひゅんっ！」

「あ……」

と思ったら、タロは下を向いて盛大にくしゃみをした。

「タロ、あの……何時間ここで待ってたの？」

「はい、えーと、五時間くらいでしょうか」

鼻水すすりながら平然と彼は答える。けど私はそれを聞いて、また気が気じゃなくなっちゃった。

「じつ……ずっとここで!?　風邪ひくじゃない!」

「う、ごめんなさい……」

タロの額に手を当てたら、温かいを通り越してやけに熱い。また無理してくれたな、この人は……

「謝らないでいいから……帰って体温めないと！」

「はは……そうですね、すみません……」

私は急いでタロと一緒に立ち上がって、自分の傘に二人で入った。

「わあ、相合い傘ですねえ」

「何言ってるのさ……ほら帰ろ」

なんだかタロがフラフラし始めた。もう、私のためになんて言いながら風邪ひいてほしくないよ。

「あの……ユマ、ちょっとお願いして構いませんか？」

「何？ なんでも言ってるな」

タロは私にもたれ掛かるようにして歩きながら呟いた。

「ユマの……お粥が食べたいです」

お粥って……ああ、そっか。

「うん、すぐ作ってたげるよ」

「ありがとうございます。……何だか去年と同じみたいです」

タロはふと後ろのベンチに目をやりながら感慨深げに言った。

ちょうど去年、タロはあそこに一人でいた。……でも今年は

「うん。今年は逆だよ」

「逆……？」

「うん」

だって……今年はタロが迎えに来てくれたから。

はち（前書き）

おまけ的エピソードです。

はち

「——お金、返ってこないの？」

「はい、先に払って準備していただく予定でしたので……ぐずっ」

僕はお家に帰ってすぐにベッドに入れられ、暖かい布団で寝かせてもらってます。体温を計っていただいたところ、ちょっとだけ熱が出ていました。なんだか申し訳ないです。

外は先程から雪の勢いが強くなり、窓が時折吹き付ける風に音を立てています。ユマの言うとおり早めに帰って正解でした。

「そつかぁ……もう出来るから、な」

「はい」

深夜遅くにも関わらず、ユマは今からお粥を作ってくれています。晩御飯はそれ、ということになります……

「ほい、出来たよっ」

「ありがとうございます。……ユマの分は？」

持ってきていただいたのは、お椀一杯だけのお粥。ユマは食べないのでしょいか。

「うん……食欲ないんだ」

「……」

「ホントにごめんな、こんな晩御飯になっちゃって」

やっぱり、気が重いのでしょうか……ユマはとても優しい方ですから。確かに、僕も今日は残念でしたけど……

「ユマっ」

「な、なに？」

僕はそんなユマの顔を見たかったわけではありません。ここは一肌脱ぎましょう。

「食べさせてくれますか？ お粥」

「え……な、なんで？」

実はこういうところは、ユマは恥ずかしがり屋なのです。

「お嫌ですか？」

「嫌じゃ、ないけど……いいよ」

ユマは少しぎこちない動きでお碗を持って、寝ている僕の前に座りました。そしてスプーンで掬った時を見逃しません。

「よかったら、フーフーしてください」

「ええっ？ ……わ、わかったよ……」

ユマはまたおどつきながら、僕から目を逸らして口先でフーツとお粥に息を吹き付けました。

「……ん」

「いただきます」

そして

「あーん」をした僕の口へ。……実際やられるとかなり恥ずかしいですね。でもお粥は最高の味です。

「じゃあ、次は僕が食べさせてあげます」

僕は布団から手を出して、ユマの持っていたお椀をさっと取りました。すると彼女はあたふたして首を振ります。

「へ？ い、いいよ！ 私いないからっ」

「……僕からは食べさせてもらいたくないですか？」

「だから、別に自分で食べられるから……」

「でも食欲がないんでしょう？」

「う……」

普段はこんなことしませんが熱のせいでしょうか。なんだか楽しい気分です。

「食べて下さい。お願いします」

「……なんか意地悪だな今日は。いいけどさ……」

あはは、むくれてしまいました。

でもごめんなさいユマ。今日だけお願いを聞いてください。

「はい、あーんして下さい」

「……ほい」

僕は先程ユマがしてくれたように、掬ったお粥をフーフーして。困った顔の彼女の口に運びました。

「むぐむぐ……」

「ふふ……風邪が移ったらダメですから、後でうがいしてくださいね」

「んなの……今更じゃん。もういいだろう」

にやにやしながらユマを見つめていると、お椀を奪われてしまいました。それでも彼女を見続けます。

「ふふふ、美味しいですね」

「……もう、何だよ」

そのうちユマは僕につられて、ふっと笑顔を見せてくれました。

「やっぱりユマは笑顔が素敵な人です。やっと見せてくれました」

「……」

今日は……あ、もう昨日ですか。ユマの笑顔を見たかったのですから。聖夜に相応しい、もう天使のような美しさです。

「ユマのその顔が見られたら、もう何も要りません。だからもう気にしないでください」

「……タロ」

ユマはお腕を置くと、いきなり寝ている僕に抱き着いてきました。

「わ、ユマ？」

「ありがと……タロ。大好き」

……。

どうしましょう。色々大変です。耳元でそんなこと言われたら。

「……なんか天に昇るような温かい気持ちです」

「馬鹿」

「馬鹿は嫌いですか」

「大好き」

「ユマは馬鹿じゃありません。でも大好きです」

「……私ら馬鹿だよ」

「……そうですね」

——クリスマスは終わりました。でも、そんなのいいんです。

神様はいるのでしょうか。いたら僕は、二度感謝します。

ユマと出会わせてくれてありがとうございます。そして、こんな僕にも幸せを下さってありがとうございます。

僕も頑張りますよ。ずっと、ユマを幸せにしてあげます。

……

「――今日が最後だから、ちょっと遅くなるかも」

「頑張つて下さいね。晩御飯は何がいいでしょうか？」

寒い朝。私は今年最後の仕事に出ようとしてた。

いつも通り玄関までタロが見送ってくれて、新妻さんみたいにそんなことを聞いてくる。

「んー、なんでもいいよ。任せる」

「わかりました。じゃあ温かいものを作って待ってます」

こんなこと毎日平然と言ってくれる人なんか、女でもないなさそうだよな。私って幸せな人間かも……って、最近じゃタロに似てきたのかそんなことまで考えるようになってきた。まあ、実際幸せだからいいんだけど。

あのクリスマス以来だ。タロが今までより愛おしく感じる。

こんな風に思ふのって続くのかなって、時々不安になったりもするけど……

「いつてらっしゃい、ユマ」

「うん」

……彼に触れてもらうと、不思議と不安が消えるんだ。これってか

なり重症かも。もちろん、いい意味で。

「じゃあいつてきますっ」

「いつてらっしゃいませっ」

——ずっと傍にいられるといいな。最高のクリスマスの思い出と一緒に、ずっと。

はち（後書き）

お読みくださり、ありがとうございます！ 感想ご指摘または文句でも貰えると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6978f/>

タロとユマ

2010年10月11日01時33分発行